

不安静穏化機能尺度の妥当性の再検討

田 澤 安 弘
近 田 佳 江

不安静穏化機能尺度の妥当性の再検討

田 澤 安 弘 近 田 佳 江

目次

- I 問題と目的
- II 方法
 - 1. 使用される心理尺度
 - 2. 実施の手続き
 - 3. 倫理的配慮
 - 4. 分析の手続き
- III 結果
 - 1. 因子構造と内的整合性
 - 2. 基本統計量
 - 3. 妥当性
 - 4. カットオフ値
- IV 考察
 - 1. 因子構造と内的整合性
 - 2. 基本統計量
 - 3. 妥当性
 - 4. カットオフ値
- V 本論の限界と今後の課題
- 謝 辞
- 文 献

[要旨]

われわれは、不安を静穏化する心理的機能のダイナミック・アセスメントを発展させるために、社会文化的な理論と整合する心理尺度を作成した。この不安静穏化機能尺度は、すでに信頼性と妥当性について検証済みであるが、併存的妥当性などに関してさらに詳しく調査すべきことが課題として残されている。本論が目的とするのは、そのような課題を解決するために、主として不安静穏化機能尺度の基準関連妥当性に関して再検討することである。144人を対象とした調査を実施した結果、不安静穏化機能尺度と、新版 STAI 状態-特性不安検査、精神的回復力尺度、ローゼンバーグ自尊感情尺度、多面的楽観性測定尺度、感情調節尺度、存在受容感尺度、セルフ・コンパッション尺度、Emotion Regulation Questionnaire、Cognitive Emotion Regulation Questionnaire のあいだに、中程度の有意な相関が認められた。

I 問題と目的

われわれは、不安を静穏化する心理的機能の「ダイナミック・アセスメント (Dynamic Assessment)」(Lidz & Elliott, 2007) をさらに発展させるために、社会文化的な理論と整合し、「発達の最近接領域 (zone of proximal development)」(Vygotsky, 1933) と関連づけることのできる尺度を作成した。それが「発達の過程で精神間における他者との社会的関わりを通して心内化されたもので、ストレス状況など何らかの要因で昂じた不安を精神内において静穏な方向へと自己調整する機能」

を測定する不安静穏化機能尺度である (田澤・橋本, 2019)。

この尺度に関わる先行研究 (以下「先行研究」と表現する際はすべて田澤・橋本(2019)を意味する) では、信頼性と妥当性について検討した。しかし、結果として併存的妥当性などに関して、さらに詳しく調査すべきことが課題として残された。本論が目的とするのは、そのような課題を達成するために、主として不安静穏化機能尺度の基準関連妥当性について再検討することである。そのため、必要に応じて先行研究の結果と対比しながら、新たな調査結果について検討を加えるつもり

キーワード：不安静穏化機能尺度、基準関連妥当性、ダイナミック・アセスメント

である。

II 方 法

1. 使用される心理尺度

不安静穏化機能尺度 (Anxiety-Soothing Function scale[ASF])：田澤・橋本 (2019) の作成した ASF を用いた。これは不安状態からの回復を促進する心理社会的な不安静穏化機能を測定する尺度であり、「セルフトークによる静穏化」、「自動的静穏化」、「心内化された肯定的な声」の3因子、全17項目から構成されている。1～5の5件法で回答を求めた。

新版 STAI 状態-特性不安検査(State-Trait Anxiety Inventory-JYZ[STAI])：肥田野ら (2000) の作成した STAI を用いた。これは「状態不安」および「特性不安」を測定する尺度であり、いずれも1因子、20項目から構成されている。今回は「特性不安」のみ使用し、1～4の4件法で回答を求めた。

精神的回復力尺度 (Adolescent Resilience Scale[ARS])：小塩ら (2002) の作成した ARS を用いた。これは精神的な落ち込みからの回復を促す心理的特性である精神的回復力を測定する尺度であり、「新奇性追求」、「感情調整」、「肯定的な未来志向」の3因子、21項目から構成されている。今回は「感情調整」のみ使用し、1～5の5件法で回答を求めた。

日本語版 ローゼンバーグ自尊感情尺度 (Rosenberg Self-esteem Scale [RSES-J])：Mimura & Griffiths (2007) の作成した RSES-J を用いた。これは自尊感情または自尊心を測定する尺度であり、1因子、10項目から構成されている。1～4の4件法で回答を求めた。

多面的楽観性測定尺度 (Multidimensional Optimism Assessment Inventory[MOAI])：安藤ら (2000) の作成した MOAI を用いた。これは楽観性を多面的に測定する尺度であり、「楽観的な能力認知」、「割り切りやすさ」、

「外在要因への期待」、「運の強さへの信念」、「楽天的楽観」、「楽観的展望」の6因子、36項目から構成されている。今回は「楽観的な認知能力」と「割り切りやすさ」のみ使用し、1～5の5件法で回答を求めた。

感情調節尺度日本語版(Emotion Regulation Questionnaire[ERQ-J])：吉津ら (2013) の作成した ERQ-J を用いた。これは日常生活において感情生起過程の各段階に応じて行われる感情調節方略を測定する尺度であり、「再評価方略」と「抑制方略」の2因子、10項目から構成されている。1～7の7件法で回答を求めた。

存在受容感尺度 (Being-Accepted Scale[BAS])：高井 (2001) の作成した BAS を用いた。これは、ありのままの自己が他者から受容されている感覚、および人知を超越した力によってもトータルに受容されている感覚を測定する尺度であり、「他者からの受容感」、「孤独感・疎外感」、「超越力を意識」、「感謝・安らぎ感」の4因子、19項目から構成されている。今回は「孤独感・疎外感」を除く3因子を使用し、1～5の5件法で回答を求めた。

日本語版 Cognitive Emotion Regulation Questionnaire (CERQ)：榊原 (2015) の作成した CERQ を用いた。これはさまざまな認知的感情制御方略を測定する尺度であり、「肯定的再評価」、「大局的視点」、「反芻」、「受容」、「自責」、「肯定的再焦点化」、「他者非難」、「破局的思考」、「計画への再焦点化」の9因子、35項目から構成されている。1～5の5件法で回答を求めた。

セルフ・コンパッション尺度日本語版 (Self-Compassion Scale[SCS-J])：有光 (2014) の作成した SCS-J を用いた。これは苦痛や心配を経験したときに、自分自身に対する思いやりの気持ちを持ち、否定的経験を人間として共通のものとして認識し、苦痛に満ちた考えや感情をバランスがとれた状態に

しておくセルフ・コンパッションを測定する尺度であり、「自分へのやさしさ」、「共通の人間性」、「マインドフルネス」、「自己批判」、「孤独感」、「過剰同一化」の6因子、26項目から構成されている。1～5の5件法で回答を求めた。

2. 実施の手続き

X年Y月に、札幌市内の私立大学に通う学生162人を対象に質問紙調査を行った。調査はわれわれ以外の教員が担当する科目の授業時間に実施し、即時回収した。白紙による回答および欠損値のあるデータ18人分を全て除外すると、有効回答は144人（男性56人、女性88人）、平均年齢は 19.70 ± 1.00 歳であった。先行研究の平均年齢は 18.53 ± 0.86 歳であり、有意な差が認められた ($t(360) = 11.386, p < .001$)。

3. 倫理的配慮

質問紙配布時に、調査の目的等を説明して無記名による協力を求めた。調査への協力は自由意志によるものであることを期待し、協力の意志がない場合には白紙で提出してもよいこと、白紙でも不利益を被ることが一切な

いことを説明した。また、データは研究目的以外には使用されないこと、厳重に保管されること、結果が公表されてから5年の保管期間を経て適切な方法で処分されることを保証した。なお、本研究は北星学園大学倫理審査委員会の承認を得て実施されたものである。

4. 分析の手続き

まず、因子分析によって因子構造を確認した。その後、妥当性とカットオフ値の検討を行った。統計解析は、因子分析と重回帰分析に関してはSPSS (version23.0.0.0) を、その他はEZR (Kanda, 2013) を使用した。

III 結果

1. 因子構造と内的整合性

先行研究では、ASFは第1因子「セルフトークによる静穏化」、第2因子「自動的静穏化」、第3因子「心内化された肯定的な声」からなる3因子構造であることが分かっている。そのため因子数を3に固定して主因子法プロマックス回転による因子分析を行うと、先行研究と同様の結果が得られた。結果は表1に示したが、質問項目の並びは今回の調査ではな

表1 不安静穏化機能尺度の因子分析（主因子法、プロマックス回転）の結果

	因子1	因子2	因子3
セルフトークによる静穏化			
気持ちがあせっても、大丈夫だよと自分をなだめることができる。	.581	.195	-.109
心が揺れて不安定になると、自分を落ち着かせる言葉が自然に思い浮かぶ。	.625	.006	.039
動揺して心臓が動悸を打っても、心の中でリラックスする言葉を繰り返すことができる。	.735	.038	.029
心配事があっても、心の中で安心する言葉をつぶやくことができる。	.766	.034	.012
緊張して呼吸がはやくなくても、リラックスする言葉を自分にかけながら深呼吸することができる。	.758	-.146	-.030
つらくても、自分になぐさめの言葉をかけて乗り越えることができる。	.698	.003	.191
自動的静穏化			
ムツとすることが起こっても、しばらくすると気持ちが自然と切り替わっている。	.114	.663	-.146
気分が落ち込むような出来事が起こっても、しばらくして気がつくかと回復している。	-.004	.742	.037
気分が高ぶったとしても、時間がたてば自然に落ち着いている。	.195	.436	-.032
気持ちが傷ついたとしても、時間がたてば元気になる。	-.105	.745	.124
どんなに気分が落ち込んだとしても、2～3日あれば元気を取り戻すことができる。	-.081	.687	.039
心内化された肯定的な声			
これまでお世話になった人たちが、心の中で温かく見守っているような感じがする。	-.067	.027	.764
生きていることがつらくても、私の内面には自分を支えてくれる人たちの励ましの声が響いている。	-.045	.025	.837
私の内面には、心あたたまる人たちの声が響いている。	.086	-.074	.870
私の心の中には、力を与えてくれるような優しい声が響いている。	.057	-.045	.840
私の心の中には、まるで安全感を与える誰かが存在しているかのようで、それによってしっかりと守られている感じがする。	.034	-.043	.824
私はこれまで出会った人たちに勇気と愛情を与えられ、それによって生かされている。	-.023	.187	.593

く、先行研究において因子負荷量の高かった順に配列されている。

また、内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、第1因子で $\alpha = .862$ (先行研究 $= .854$)、第2因子で $\alpha = .799(.847)$ 、第3因子で $\alpha = .911(.833)$ であった。また、尺度全体では $\alpha = .900(.894)$ であり、十分な値が得られた。

2. 基本統計量

基本統計量などは表2に示した。各因子の素点と総合得点の平均値に男女差が認められなかったので、先行研究と同様に男女込みの数値になっている。先行研究とのあいだに有意な差が認められたのは、「総合得点」と「セルフトークによる静穏化」の平均値である。前者に関しては2.20点 ($t(360) = -6.17, p < .001$)、後者に関しては1.44点 ($t(360) = -6.16, p < .001$)、それぞれ今回の方が有意に高かった。

3. 妥当性

(1) 相関分析

基準関連妥当性を検討するために、ASF と、STAI、ARS、RSES-J、MOAI、ERQ-J、BAS、CERQ、SCS-Jの相関係数を算出した(表3～表6)。

STAIの「特性不安」と、ASFの総合得点、第1因子、第2因子のあいだに中程度の負の相関が($p < .001$)、第3因子に弱い負の相関が($p < .001$)、それぞれ認められた。先行研究では総合得点と第2因子とのあいだにのみ中

程度の負の相関が認められたが、今回はそれに加えて第1因子にも認められた。

ARSの「感情調整」と、ASFの総合得点のあいだに中程度の正の相関が($p < .001$)、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに弱い正の相関が($p < .001$)、それぞれ認められた。

RSES-Jと、ASFの総合得点とのあいだに中程度の正の相関が($p < .001$)、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに弱い正の相関が($p < .001$)、それぞれ認められた。

MOAIの「楽観的な認知能力」と、ASFの総合得点のあいだに中程度の正の相関が($p < .001$)、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに弱い正の相関が($p < .001$)、それぞれ認められた。また「割り切りやすさ」と、ASFの第2因子のあいだに中程度の正の相関が($p < .001$)、総合得点、第1因子のあいだに弱い正の相関が($p < .01 \sim p < .05$)、それぞれ認められた。

ERQ-Jの「再評価方略」と、ASFの総合得点、第1因子のあいだに中程度の正の相関が($p < .001$)、第2因子、第3因子のあいだに弱い正の相関が($p < .001$)、それぞれ認められた。また「抑制方略」とASFのあいだには有意な相関が認められなかった。

BASの「他者からの受容感」と、ASFの総合得点、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに弱い正の相関が認められた($p < .001$)。「超越力を意識」と、第3因子のあいだに中程度の正の相関が($p < .001$)、総合得点、第1因子のあいだに弱い正の相関が($p < .001 \sim p < .05$)、それぞれ認められた。「感

表2 ASFの基本統計量、 α 係数、因子間相関(尺度得点による)

	平均値(±SD)	α 係数	因子間相関	セルフトーク	自動的静穏化	肯定的な声
総合得点	55.69±10.92	0.900		.848	.651	.835
セルフトーク	19.00±4.67	0.862			.416	.559
自動的静穏化	18.86±3.65	0.799				.278
肯定的な声	17.83±5.49	0.911				

N=144(男性56人, 女性88人)

表3 STAI, ARS, RSES-J, MOAI, ERQ-J との相関

	特性不安	感情調整	自尊感情	楽観的認知	割り切り	再評価方略	抑制方略
総合得点	-.530***	.405***	.491***	.432***	.258**	.446***	.050
セルフトーク	-.413***	.312***	.396***	.392***	.189*	.436***	.068
自動的静穏化	-.476***	.360***	.393***	.327***	.406***	.310***	.058
肯定的な声	-.387***	.300***	.377***	.308***	.082	.310***	.002

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

表4 BAS との相関

	他者からの受容感	超越力を意識	感謝・安らぎ感
総合得点	.396***	.317***	.544***
セルフトーク	.330***	.199*	.339***
自動的静穏化	.264**	.032	.329***
肯定的な声	.332***	.441***	.576***

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

表5 CERQ との相関

	肯定的再評価	大局的視点	反芻	受容	自責
総合得点	.428***	.165*	-.003	.183*	-.131
セルフトーク	.350***	.140	.131	.276***	-.104
自動的静穏化	.275***	.008	-.268*	.090	-.181
肯定的な声	.371***	.203*	.061	.070	-.051

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

表5 CERQ との相関 (つづき)

	肯定的再焦点化	他者非難	破局的思考	計画への再焦点化
総合得点	.391***	-.018	-.148	.255**
セルフトーク	.322***	-.013	-.061	.305***
自動的静穏化	.183*	-.028	-.355***	.136
肯定的な声	.382***	-.007	-.006	.158

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

表6 SCS-J との相関

	自分へのやさしさ	共通の人間性	マインドフルネス
総合得点	.313***	.476***	.463***
セルフトーク	.221**	.428***	.493***
自動的静穏化	.309***	.257**	.305***
肯定的な声	.230**	.411***	.299***

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

表6 SCS-J との相関 (つづき)

	過剰同一化	孤独感	自己批判	トータル
総合得点	.332***	.339***	.341***	.601***
セルフトーク	.247**	.204*	.213*	.467***
自動的静穏化	.331***	.399***	.339***	.531***
肯定的な声	.231**	.237**	.272***	.446***

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

謝・安らぎ感」と、総合得点、第3因子のあいだに中程度の正の相関が ($p < .001$)、第1因子、第2因子とのあいだに弱い正の相関が ($p < .001$)、それぞれ認められた。

CERQの「肯定的再評価」と、ASFの総合得点のあいだに中程度の正の相関が ($p < .001$)、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに弱い正の相関が ($p < .001$)、それぞれ認められた。「大局的視点」と、総合得点、第3因子のあいだに弱い正の相関が認められた ($p < .05$)。「反芻」と、第2因子のあいだに弱い負の相関が認められた ($p < .05$)。「受容」と、総合得点、第1因子のあいだに弱い正の相関が認められた ($p < .001 \sim p < .05$)。「自責」とASFのあいだには有意な相関が認められなかった。「肯定的再焦点化」と、ASFの総合得点、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに弱い正の相関が認められた ($p < .001$)。「他者非難」と、ASFのあいだには有意な相関が認められなかった。「破局的思考」と、第2因子のあいだに弱い負の相関が認められた ($p < .001$)。「計画への再焦点化」と、総合得点、第1因子のあいだに弱い正の相関が認められた ($p < .001 \sim p < .01$)。

SCS-Jの「自分へのやさしさ」と、ASFの総合得点、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに弱い正の相関が認められた ($p < .001 \sim p < .01$)。「共通の人間性」と、総合得点、第1因子、第3因子のあいだに中程度の正の相関が ($p < .001$)、第2因子とのあいだに弱い正の相関が ($p < .01$)、それぞれ認められた。「マインドフルネス」と、総合得点、第1因子のあいだに中程度の正の相関が ($p < .001$)、第2因子、第3因子とのあいだに弱い正の相関が ($p < .001$)、それぞれ認められた。「過剰同一化」と、総合得点、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに弱い正の相関が認められた ($p < .001 \sim p < .01$)。「孤独感」と、総合得点、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに弱い正の相関が認められた ($p < .001 \sim p < .05$)。「自己批判」と、総合得点、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに弱い正の相関が認められた ($p < .001 \sim p < .05$)。「総合得点」と、総合得点、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに中程度の正の相関が認められた ($p < .001$)。

.001)、第2因子、第3因子とのあいだに弱い正の相関が ($p < .001$)、それぞれ認められた。

「過剰同一化」と、総合得点、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに弱い正の相関が認められた ($p < .001 \sim p < .01$)。「孤独感」と、総合得点、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに弱い正の相関が認められた ($p < .001 \sim p < .05$)。「自己批判」と、総合得点、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに弱い正の相関が認められた ($p < .001 \sim p < .05$)。「総合得点」と、総合得点、第1因子、第2因子、第3因子のあいだに中程度の正の相関が認められた ($p < .001$)。

(2) 重回帰分析

さらに基準関連妥当性を確認するために、STAIの特性不安を目的変数、ASFの3因子を説明変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った(表7)。その結果、第2因子と ($p < .001$)、第3因子が ($p < .001$)、特性不安に対して負の影響を及ぼすことが理解された。

4. カットオフ値

カットオフ値を再検討するために、高不安に対するASFの識別能や予測能など各種の正確度の検討を行った(表8)。ASFの総合得点によって、STAIの特性不安得点が93パーセントイル以上である高不安の協力者を識別し得るように、ROC(受信者動作特性試験)曲線を用いて感度と特異度の和が最大になる閾値を求めた。その結果、総合得点の閾値は素点で50点(以下)となり、感度が0.800、特異度が0.716、AUC(ROC曲線下面積)

表7 ASFによるSTAIの重回帰分析

	β			Adjusted R ²
	セルフトーク	自動的静穏化	肯定的な声	
特性不安	(n. s.)	-.399***	-.276***	0.287***

*** $p < .001$

表8 正確度の各種指標

	今回		先行研究
総合得点の閾値	50	52	52
特異度	0.716	0.619	0.562
感度	0.800	0.800	0.941
AUC (95% CI)	0.805 (0.675-0.935)	—	0.816 (0.715 - 0.917)
陽性的中率	17.5%	13.6%	13.9%
陰性的中率	97.9%	97.6%	99.2%
陽性結果の尤度比	2.82	2.10	2.15
陰性結果の尤度比	0.28	0.32	0.11

特性不安得点を93パーセンタイル以上に設定

が0.805と示された。さらに、総合得点による特性不安得点的中率は、93パーセンタイル以上の高不安者に対応するようにテスト前確率（有病率）を7%、感度を0.800、特異度を0.716として解析すると、陽性的中率が17.5%、陰性的中率が97.9%と示された。陽性結果の尤度比は2.82、陰性結果の尤度比は0.28であった。

なお、表8には、今回の結果だけでなく、先行研究で得られた最適なカットオフ値52点における各種指標の数値と、今回のデータに52点のカットオフ値を当てはめた際の数値を併記した。

IV 考察

1. 因子構造と内的整合性

因子構造に関して、今回の調査では先行研究と同様の結果が得られた。因子内における各質問項目の負荷量は変化しているものの、3因子間で質問項目が移動したり、因子負荷量の低さによって項目が削除されたりすることはなかった。また、内的整合性を検討したところ、先行研究と同様にして、各因子、総合得点とも、十分な値が得られた。したがって、ASFは、安定した因子構造を備えていると言えるであろう。

2. 基本統計量

先行研究と同様に男女差は認められなかったものの、先行研究よりも「総合得点」と第1因子「セルフトークによる静穏化」の平均値が今回有意に高くなっている。今回のデータは平均年齢も有意に高くなっていることから、ASFの得点には年齢や発達段階による違いがあるのかもしれない。今後検討を要するであろう。

3. 妥当性

(1) 相関分析

まず、ASFのすべての因子と総合得点に共通しているのは、SCS-Jの総合得点との関連性であった。したがって、本尺度によって測定される不安静穏化機能は、全体として、苦痛や心配を経験したときに自分自身に対する思いやりの気持ちを持ち、否定的経験を人間として共通のものとして認識し、苦痛に満ちた考えや感情をバランスがとれた状態にしておくセルフ・コンパッションと関連していることが理解されるであろう。

第1因子は、STAIの「特性不安」、ERQ-Jの「再評価方略」、SCS-Jの「共通の人間性」、「マインドフルネス」、「総合得点」と中程度の相関があり、関連性のあることが理解された。したがって「セルフトークによる静穏化」は、①特性不安、②感情の原因となる出来事を再解釈することにより感情の生起そのもの

を調節してポジティブ感情を増加させる再評価方略, ③人間が本来周りの事象によって生かされている存在であることに気づき, 周りと同化して苦しみを共有し緩和することのできる程度, ④ある否定的な考えが頭に思い浮かんだときにそれにとらわれず, 現実起こっていることに意識を集中させることができるマインドフルネスの程度, そして, ⑤セルフ・コンパッションと関連していると言えるであろう。

ASF の3因子の中で, この因子が唯一「再評価方略」および「マインドフルネス」と関連することは注目に値する。

「セルフトークによる静穏化」は, 先行研究における回帰分析の結果として「二次元レジリエンス要因尺度 (Bidimensional Resilience Scale[BRS])」(平野, 2010) の「統御力」や「問題解決志向」の影響を受けることが分かっている。いずれも問題に対する積極的な対処を意味しており, 認知的な感情調節である今回の「再評価方略」との関連性と合せて考えると, 積極的な対処方略としての性格がさらに明確になったように思われる。また「マインドフルネス」は, ある否定的な考えが頭に思い浮かんだときにそれにとらわれず, 現実起こっていることに意識を集中させることができることを意味するのであるが, これは「集中」と「距離化」という点で, 「セルフトークによる静穏化」と共通しているように思われる。つまり, 現実に集中するか, 自分自身に「大丈夫だよ」と話しかけるセルフトークに集中するかの違いはあるものの, いずれも何かに集中すると同時に不安を喚起する雑念から距離化しなければならないからである。したがって, 「マインドフルネス」との関連性によって, この因子の性格がより一層明らかになったように思われる。

第2因子は, STAI の「特性不安」, MOAI の「割り切りやすさ」, SCS-J の「総合得点」と関連性のあることが理解された。したがっ

て「自動的静穏化」は, ①特性不安, ②自分が失敗してもあまり気にせず, 物事にあまり執着しない傾向, そして, ③セルフ・コンパッションと関連していると言えるであろう。先行研究においても, この因子はBRSの「楽観性」と関連することが分かっている。今回, MOAIの「割り切りやすさ」との関連性が見出されたことから, 不安が自動的に静穏化することには楽観的な傾向が絡み合っていることが理解され, この因子の性格がより明確になったように思われる。

第3因子は, BASの「超越力を意識」, 「感謝・安らぎ感」, SCS-Jの「共通の人間性」, 「総合得点」と関連性のあることが理解された。したがって「心内化された肯定的な声」は, ①人知を超越したものによって生かされ, 守られ, ありのままの自分が受け入れられているといった受容感, ②過去において他者からあたたかく受容され, 安らぎや喜びを感じた経験, およびいろいろな人のおかげで今までやってこれたことへの感謝や日常生活のささやかなことに対する感謝の気持ち, ③人間が本来周りの事象によって生かされている存在であることに気づき, 周りと同化して苦しみを共有し緩和することのできる程度, そして, ④セルフ・コンパッションと関連していると言えるであろう。

先行研究において, この因子は関連性を有する他の心理尺度がなく, その特徴が不明瞭なものにとどまっていた。しかし, 今回はBASの「超越力を意識」, 「感謝・安らぎ感」との関連性が見いだされ, 因子としての性格がかなり明確になったように思われる。心内化された他者たちの声は, 人知を超えた肯定的な力によって守られていることや, 不安よりもむしろ安らぎとの関連性があるようである。

総合得点はSTAIの「特性不安」, ARSの「感情調整」, RSES-Jの「自尊感情」, MOAIの「楽観的な認知能力」, ERQ-Jの「再評価方

略]、BASの「感謝・安らぎ感」、CERQの「肯定的再評価」、SCS-Jの「共通の人間性」、「マインドフルネス」、「総合得点」と関連性のあることが理解された。したがって「総合得点」は、①特性不安、②感情を適切にコントロールできること、③自尊感情、④問題や課題に直面したときに自己の対処能力を過大にもしくは楽観的に評価する傾向、⑤感情の原因となる出来事を再解釈することにより感情の生起そのものを調節してポジティブ感情を増加させる再評価方略、⑥過去において他者からあたたかく受容され、安らぎや喜びを感じた経験、およびいろいろな人のおかげで今までやってこれたことへの感謝や日常生活のささやかなことに対する感謝の気持ち、⑦個人の成長という観点からできごとにポジティブな意味を置く思考、⑧人間が本来周りの事象によって生かされている存在であることに気づき、周りと同化して苦しみを共有し緩和することのできる程度、⑨マインドフルネス、そして、⑩セルフ・コンパッションと関連していると言えるであろう。

(2) 重回帰分析

第1因子の「セルフトークによる静穏化」は、特性不安と関連するものの、それに対して有意な影響を及ぼさないことが理解された。第2因子の「自動的静穏化」は特性不安と関連し、なおかつそれを低減する作用を及ぼすことが理解された。第3因子の「心内化された肯定的な声」は特性不安との関連性は認められないものの、それを低減する作用を及ぼすことが理解された。

セルフトークによる静穏化は、性格特性的な不安に対して直接的に作用するのではなく、何らかの媒介変数を介して影響を及ぼすのかもしれない。あるいは、因果関係の方向としては真逆で、性格特性的な不安によってセルフトークによる静穏化が減弱してしまう、または不安喚起的な悪性のセルフトークが促進されてしまう、といった可能性も考え

られるかもしれない。いずれにせよ、第1因子に関しては、特性的な不安と状態的な不安の兼ね合いの中でさらに検討する必要がある。

4. カットオフ値

今回は総合得点の最適なカットオフ値が50点になり、先行研究の52点とは若干異なる結果になった。今回は閾値が少し低くなったものの、感度がやや下がり特異度がやや上がっている。いずれにせよ、先行研究の結果と同様にして、診断学的にASFは高不安者の確定診断には使用できず、除外診断にはすこぶる精度が高いことが改めて理解された。

これでカットオフ値が2種類になったわけであるが、いずれを選択すればよいのであろうか。この場合、より厳格な基準によって選択すべきと考え、先行研究によって得られた52点を採用することにする。これによって、ASFの総合得点が53点以上であれば不安静穏化機能が十分に機能しており高不安の存在が97.6%～99.2%の確率で否定されるが、52点を下回れば下回るほど不安を静穏化する機能が不十分にしか作動しない可能性が高まり、13.6%～13.9%の確率で高不安の存在が疑われることになるであろう。

V 本論の限界と今後の課題

先行研究の課題として残されていた各因子の個別的な妥当性が、今回の調査によって明らかになった。これによって、ASFは尺度全体の総合得点だけでなく、それを構成する3因子をそれぞれ単体で使用することも可能になったと言えるであろう。

今回の調査の限界は、協力者の人数が少ないことであろうか。同一の質問票を使ってさらに調査することを考えたのであるが、新型コロナウイルスの影響が大きく、追加的に実施することが困難になってしまった。

今後の課題として残されたのは、ASFの予測的妥当性および再テスト法による信頼性の検討、世代ごとの標準化、さらに第1因子「セルフトークによる静穏化」の再検討である。できる限り早く調査を進めるつもりである。

謝 辞

調査のためにお世話になった北星学園大学非常勤講師渡辺舞先生と、ご協力いただいた学生の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

文 献

- 安藤史高・江崎真理・小川一美・中西良文・原田一郎・嫡濱秀行・小平英志・川井加奈子 (2000) 多面的楽観性測定尺度の作成. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学47, 237-245.
- 有光興記 (2014) セルフ・コンパッション尺度日本語版の作成と信頼性、妥当性の検討. 心理学研究, 85 (1), 50-59.
- 肥田野直・福原真知子・岩脇三良・曾我祥子・Spielberger, C. D. (2000): 新版 STAI マニュアル 実務教育出版.
- 平野真理 (2010): レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成 パーソナリティ研究 19 (2), 94-106.
- Kanda, Y. (2013): Investigation of the freely available easy-to-use software 'EZR' for medical statistics. Bone Marrow Transplantation, 48, 452-458 ; doi : 10. 1038/bmt. 2012. 244 ; published online 3 December 2012.
- Lidz, C. S., & Elliott, J. G. (2007): Dynamic Assessment : Prevailing Models and Applications. Greenwich : JAI Press.
- Mimura, C. & Griffiths, P. (2007) Japanese version of the Rosenberg Self-esteem Scale : Translation and equivalence assessment. Journal of Psychosomatic Research, 62, 589-594.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 (2002) ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成. カウンセリング研究, 35, 57-65.

- 榎原良太 (2015) 認知的感情制御方略の使用傾向及び精神的健康との関連—日本語版 Cognitive Emotion Regulation Questionnaire (CERQ) の作成及びネガティブ感情強度への着目を通して. 感情心理学研究, 23 (1), 46-58.
- 高井範子 (2001) 他者からの受容感と生き方態度に関する研究—存在受容感尺度による検討. 大阪大学教育学年報, 6, 245-254.
- 田澤安弘・橋本忠行 (2019) 不安静穏化機能尺度の開発—因子構造、信頼性、妥当性の検討. 人間性心理学研究, 37 (1), 57-68.
- Vygotsky, L. S. (1933) : Проблема возраста и диагностика развития. 年齢期の問題と発達診断学 [発達の最近接領域]. 土井捷三・神谷栄司 (監訳) (2012) : 「人格発達」の理論 : 子どもの具体心理学 三学出版 51-69.
- 吉津潤・関口理久子・雨宮俊彦 (2013) 感情調節尺度 (Emotion Regulation Questionnaire) 日本語版の作成. 感情心理学研究, 20 (2), 56-62.